この舞を、後世に



行田には、六つの地域で受け継がれてきた「ささら獅子舞」があります。

同じまちにありながら、その姿は一つではありません。舞う演目も、そこに込められた物語も、それぞれ違います。

その舞を今日までつないできたのは、地域の人たちです。教える人がいて、教わる人がいる。受け取ったものを、また次の人へ渡していく。

六つの舞をたどりながら、人から人へと受け継がれてきた行田の「継承」の姿を見つめます。

ささら獅子舞とは

「獅子舞」と聞くと、一頭の獅子を二人で動かす姿を思い浮かべる人もいるかもしれません。行田市に伝わる獅子舞は、一人が一頭の獅子を演じ、三頭一組で舞う「三匹獅子舞」です。

こうした一人立ちの三匹獅子舞は東日本に多く、埼玉県にも数多く伝承されています。行田市内に残る六つの獅子舞は、全て無形民俗文化財に指定されています。このうち下中条の獅子舞は埼玉県指定、他の5地区は行田市指定です。五穀豊穣や無病息災、家内安全、厄除けなど、人々の願いと結び付きながら受け継がれてきました。

なぜ「ささら」と呼ぶのか？

「ささら」とは、丸竹の先を細かく割って作る楽器の名前です。埼玉県内には、この楽器にちなんで「ささら獅子舞」と呼ばれる三匹獅子舞が各地に伝わっています。

行田市では文化財の指定名称に「獅子舞」を用いていますが、地域では親しみを込めて「ささら」とも呼ばれています。身近な呼び名にも、地域で受け継がれてきた文化の一端が表れています。



1 三人で、三頭を舞う



大きな獅子の中に複数人が入るのではなく、一人が一頭の獅子を演じます。三人の動きが組み合わさって、一つの舞になります。

2 舞うのは、獅子だけじゃない



笛、歌、花持ち、花籠、面化、棒方など、獅子以外にもさまざまな役があります。地区によって構成も異なり、多くの人が一つの舞を支えています。

3 動きの中に、物語がある



大蛇を退治する、雌獅子を探すなど、神話や伝説を題材にした演目もあります。背景を知ると、獅子の動きが物語の一場面として見えてきます。

教わる人から、教える人へ。

市内に受け継がれる六つのささら獅子舞。<u>しかし、担い手の減少や高齢化など、それぞれが次の世代へつないでいくための課題を抱えています。</u>

今回は、一度活動が途絶え、その後復活した長野ささら獅子舞保存会を訪ねました。保存会発足の頃から関わる二人と、近年加わった若者。その姿から、長野のささらの「これまで」と「今」を見つめます。

長野ささら獅子舞保存会HP



笛方 岸田 昌久さん（79歳）

見て覚えた音を、残せる形に

参加した当初は、何も分からないまま笛方になり、最初に教わったのは吹き方ではなく笛の作り方。師匠の家にあった何百本もの篠竹から一本をのこぎりで切り出し、見本に合わせて穴の位置を写し、ナイフで削って作っていました。

いざ吹くと、音さえ出ませんでした。練習では師匠の斜め後ろに座り、指の動きをひたすらまねる。1曲約30分、それを4曲。吹き続けるうちにふらふらになるほどで、「音は出ないわ、苦しいわ、怒られるわ」。それでも何年も繰り返し、少しずつ覚えていきました。やがてカセットテープに演奏を録音し、止めては戻しながら一音ずつ確かめ、指の押さえ方を数字で記録しました（指番号譜）。その後、別の笛方により五線譜も作られ、師匠の指を追いかけて覚えた音は、時代を経て譜面となり、今の世代へ引き継いでいます。



会長・獅子方 島嵜 光司さん（77歳）

自分が憧れた獅子を、今度は見せる側に

私が子どもの頃は、祭りの日になると獅子を追いかけていました。車もほとんど通らない時代、長野の道を獅子の一行が練り歩き、多くの人がその姿を見守っていました。子どもながらに、舞う獅子はとにかく格好よく見えました。

若い担い手が減り、獅子舞を奉納できない時期がありましたが、獅子舞が途絶えたことを惜しんだ地域の世話役が保存会を発足。30代半ばだった私も声を掛けられ、獅子方として加わりました。それから約35年、獅子を舞ってきました。今は、私たちの舞を幼い頃から見てきた人たちが獅子方の中心になっています。自分が先輩たちを見て「格好良い」と思ったように、今度は若い人が「やってみたい」と思ってくれる。獅子頭や道具の扱い、祭りの準備、先輩たちから教わった知恵も、次の世代へ渡していきたいと思っています。

長野ささら獅子舞のあゆみ

正徳3(1713)年
久伊豆神社の祭礼で始まったと伝えられる

昭和43(1968)年頃
担い手の減少などにより活動を一時中断

昭和56(1981)年
地域の有志が保存会を設立し活動を再開

平成21(2009)年
「長野の獅子舞」が行田市指定無形民俗文化財に指定

現在
若い世代も加わり幅広い世代で継承活動が続いている

迫力に惹かれ、今は自分が舞う側に

野形 蒼佑さん（15歳）



保育園の頃にお世話になった先生から「やってみたら」と声を掛けられたのがきっかけです。イベントでささらを目の前で見て、獅子の動きや笛の音の迫力に圧倒され、練習を見学して参加を決めました。

最初は裏方でしたが、最近は「中獅子」としてデビュー。視界の狭い獅子頭をかぶり、笛に合わせ周囲との距離をつかむのは難しく、デビュー2日目には獅子頭がずれ、最後まで舞えず悔しい思いもしました。それでも、本番は緊張より「楽しい」が勝ちます。舞を見てもらい、喜んでもらえることがやりがいです。まずは見に来てもらい、同年代の仲間が増えたらうれしいです。

新たな担い手との出会い――。



ささらに関わる人は、地域の中だけに留まりません。保存会とのつながりをきっかけに、大学生や市外から参加する人もいます。ふと興味を持ち、誰かとつながる。その小さなきっかけが、これからの担い手につながっていくのかもしれません。



稽古では音に合わせて動きをそろえていきます



長く使うため、衣装・道具の手入れは欠かせません



先輩から直接知恵や所作を教わります